



人はたがやす 水牛はたがやす 稲は音もなく育つ

渡世—管理棟から子どもへ	石毛拓郎	2
いま学校収容所で起つてること	——石毛拓郎さんにきく	4
三等車で	スラチャイ・ジャンテイマトン	22
北海道水牛のひとり旅	福山敦夫	28
水牛楽団のページ		31

## 渡世

——管理棟から子どもへ

石毛拓郎

夢ばかりみて疲れる。

それも、落ちる夢が多い、という。

根が暗いんだよね、ワタシ。

笑いながら、落ちてゆくときってどんな感じ?ときけば

「お父さんとお母さんがいいあらそいをしていて

その二人の間に学校の管理棟が突然、わりこんできて、

つまらない気分ね。」

管理棟が夢を食べてしまうんだ。

そんなに夢をみるなら、それ記録でもしたら?

と、何気なくいったら、次の日

つまらない夢ですが、とって、

夢日記を無雑作においていったのだ。

机に投げだされた夢をゆっくり追ってゆく。

(ある夜、お父さんとお母さんがすもうみたいな形で、ケンカをしていました。小さい私は、

ケンカをしていることも知らず、うちわを持って、急に

「ハツケヨイ、ノコッタ」とさげびました。

それで夢が終わりました。

その叫びは大人のお愛のかたちへ……すっかりみてるんだね。

はずかしげに君の小さな胸もふくらんで

ああ、なるほどね。

君も夢の中で、境界を渡ろうとしているんだね。

## いま学校収容所で起つてること——石毛拓郎さんにきく

学校は世間とはちがうぞ

——石毛さんは詩をかくほかに、というか、いま所沢で小学校の先生をやっているわけだけども、何年まえからですか。

ええと、五年まえ……ことして六年めですね。まえの会社で営業を三年間やって病氣しちやっただけです。えたいのしれない顔面マヒの病氣をしちやっけて、商売なんなくなっちゃったんです。

——それは営業の仕事に関係あるわけ？

はもうそろそろ落ち目だったけど、プレハブの浄化槽、あと船船——プラスチック船は百トンまでしかみとめられてないんだけど、そのメーカーまわりですね、北陸から九州まで。

——そのまえは？

学校おわって三年間、女性ものの衣料関係の会社にいたんだけど、いやになっちゃって……ぜんぶ見ぬいちゃったってカッコウで。

——じゃ学生るとき教職課程は？

ぜんぜんないですよ。親戚に教師がおおいからね、そんなのバカにしたの。失業してから玉川大学にかよってとったんです。ちょうど女房の腹のなかに子どもがはいっちゃっててね、明日のことをどうしようかということになって。一年間でとれるんですよ、マジにやればね。通信教育だから自宅に送られてくるものを送りかえして、採点つけられて、あとはスクーリングについて、夏季講義をうければいいんです。で、最終的に試験をうけてパスすれば、それで単位がとれるんです。

かなりあるみたいね。うちで寝る時間が月に半分、あとは出張さきで寝るってぐあい、全国各地を車でとび回ってたからね。顔面右半分がマヒして、医者の話ではウィルス説が一般的なんだって。外資系のメーカーだったんだけど、静電塗装機の独占的なパテントをもって殿さま商売をやった。それが主流だったんだけど、つけたしみたいに別のセクションがあったんです。それはFRPといって強化プラスチックの成型機を製造販売してた。ぼくはそっちのほうだったんです。

どういこうとこに行くかという、たとえば住宅産業のバスタブ——ガラス繊維とポリエステル樹脂を混合させて型に吹きつけてつくるんです。ぼくが入ったときは住宅産業

——ぼくは基本的にみんないちど社会にでて、それから教師やったほうがいいと思うな。

ええ。でもエリート教師がおおいから異質な感じをうけるみたいですね。はじめて教師として学校にいったときは異様な感じがしたもんね、これは別世界だなっていう。学校の論理がきちっとできちやてるから、世間の常識は通用しない。たとえば民間だったらタイムカードをガチャツとやるとか、ぼくのまえの会社だったら報告制だから、報告すれば出勤表に記載されるんだけど、学校の場合は板でできた赤と黒の交番表をひっくりかえして、それからもうひとつ、でてきたらかならず出勤簿に印鑑を押すことになっているのね。ぼくはどっちもやらない、印鑑は一カ月まとめて押すっていうふうにやったら、「世間じゃそれでとおるだろうが、ここではそんないいかげんなことは許されない、だれが迷惑するのかわかっているのか」と校長にいわれた、ハッハッハ。

——流山市の教育委員会では、ハンコはまんなかになんてすぐ、きれいに鮮明に押すつてきめてるんだってね。

それから私、これは知っててやったんですが、勤務時間は八時半から四時半までっていうことになってるんですね。教師の場合は実質的に勤務時間中に中休みがとれないから、四時半から五時十五分まで、うしろに休憩時間がまとめてくっついていて、そのときは学校の外にでてもいいってことになってるんです。それをうまく利用して、ぼくは四時で退庁しちゃったんです、すつとぼけてね。

退庁？

退庁っていうんです。学校は官庁の出先機関だから。

——だって生徒は下校っていうんだろ。

そう。生徒は学校にきてるから。先生は官庁にきてる。そういうことはほかにもありますよ。生徒は一時間目、二時間目というでしょう。われわれはそうはいわないです。一校時、二校時というんです。

——で、はじめて教室で授業するときっていうのはどういう感じがするの？

るか——その話ばかりですよ。いい子っていうのは、抽象的にいえば素直であるとか、先生の話をキチンときけるかとか、ルールをまもれるとか、親を大事にするとか……。そういう先生がたにくらべると、ぼくは唯一パーソナリティだけでもってる教師なのね。ぼくはいまの学校にくるまえ、やはり埼玉の小学校に五年間いて、ことしそこを追いだされたんですよ。校長が「あいつをととう追いだした」と溜飲をさげているという話なんです。去年、ぼくはその学校で五年をおしえていたんだけど、六年の連中といつしよに修学旅行にいったんです。そのとき、やつらが余興でクイズ「百人にきました」というのをやったのね。「この学校でいちばんいい先生はだれでしょう？」——そしたら「石毛先生」というのがまずだのね。ハッハッハ。それも第一位と第二位が圧倒的な差なのね。あーあ、おれは五年間、人気とパーソナリティだけで教育やってきたんだなという感じでね。

若い教師ほど粹にはまってる

——学校で教職をとって、そのまま教師になったっていうのは九十九パーセントぐらい？

そのまえにね、免許とるまえに教育実習っていうのが一カ月間あるんですよ。それをぼくは川崎のある小学校でやった経験があるもので、べつにドギマギはしなかったですね。ただ熱き希望に燃えてというようなことははじめからなくて、無手勝流でやろうと……これはいまでもそうだけだね。

——だいたい旧師範学校出の連中は年がら年じゆう、教育実習をどうしたらいいか、授業をどうやったらいいかということばかりやってきてるもので、技術的にはすぐれてるんですね、やっぱり。ただ面白くないだけで——でも、そういう連中の子どもへのせつし方というのはおもしろいですよ。第一に、子どもと一人ずつ握手する。ハッハッハ。笑っちゃうわけね、ぼくなんか。それを実際にやるんですよ、赴任したときに。かたい握手をして、それで心がつながるといふ考えがあるんですよ。ぼくなんかこのクソガキども、握手なんかできるかと思わないから。

——教師たちはいつもどんな話をしてるの。民間とはぜんぜんちがうわけ？

ちがいますよ、そりや。自分がおしえている子どもたちのことばかりですよ。どうしたらいい子にすることができ

まえの学校ではね、ぼくが五年間いたあいだに、Uターン——というのはおかしいな、まがってはいってきた人っていうのは二人かな、三十五人中。

——そういう由緒ただしい先生たちは毛ざらいするわけ、石毛さんたちみたいなのを？

まア、うさん臭いんでしょうね。たとえばね、価値観でかならずぶつかるんですよ。ぼくは基本的には管理職とはケンカするけれども、同僚は絶対に批判しないということが鉄則としてあって、五年間、それをまもってきたんですよ。で、管理職には徹底的に抵抗する。学力テストの問題、服装の問題、掃除の身じたくの問題、給食の食べ方の問題——そういうつまらない問題に一つ一つ対応していかない、いつのまにか、かこまれちゃうんですよ。そんななかでかなりうさん臭く思われてたし、年齢も上のほうだし——とくに日共系の組合にはいつている先生がたは避けてたんじやないかな。

——いくつで先生になったんですか。

三十です。あたらしい男の先生がくるっていうんで、か

なり期待してたらしいですよ。男の先生、すくなかったんですよ。管理職をふくめて五人ぐらいしかいなかった。

——うさん臭いって、なにがうさん臭いのか。もつてる匂いとか……

匂いと、あと言葉づかいかな。それから生徒とのつきあいが先生らしくないとか……

——若い先生たちがそういうの？ 年とった先生じゃないか？

年とった人はほとんどいなかったんです、若い学校だからたとえば職員室に「石毛、いるか！」と生徒がはいってくる。これがやつらには許せないわけ。なぜそこまで教師の権威を失墜させるのかって。

——ハッハッハ。「石毛、いるか！」「おう！」というわけか。

そういう節度のないやり方がかなり毛ざらいされた。

——聖職者というイメージに自縄自縛になってる。

そうでしょうね。まえの学校では半分——十五人ぐらいが日共系の組合員でしたからね。

——いま教師志望というのはわりとおおいんだけど、みんな教育委員会の試験でふるい落されて、ヘンなやつは排除しちゃうわけでしょう？

最近はきついですよね。ぼくらのときはその境じゃないかと思う。

——じゃ、デモシカ教師のおわりごろか。

いや、そうじゃなくて、デモシカというのはもうちよつとまえ——いま四十五以上の連中がデモシカですよ。だからオイル・ショックなんかで世の中がいささかきびしくなったなというときに、民間を放棄して学校の先生になるうかという——その最後のころだったんですね。

——いま教育委員会の質問というのはなにをきくわけ？

いちばんきつくなるのは縁故関係です。縁故関係でいたいはいれるんです。だからいくら優秀な頭脳をもつていても、教職にふさわしい技能をもつていても、コネクションがないとおっぼりだされる。

——だったら教師の顔を見たら、みんな縁故ではいったと思っただい……

そう思わざるをえないですね、ぼくをふくめてね。縁故あるいは……ええと、所沢では教育センターというのを先進的につくったんですよ。病気とか産休とかで欠員がでてしまう。一週間か二週間休む先生がいると、そこに臨時で講師にいく人たちが十数人いる。アルバイトみたいなもんでですけど、そういう連中がそれでコネができて、頭をなでられたりして、面接で有利になるというようなこともありますね。

——たとえばこういう考え方があってしょう、ええと、校長がお父さんで、教師は子どもで、生徒は孫であるという……

ありますよ。家訓みたいな。校長室にバカッと貼って

ある。校訓ってやつね。「和の精神である」とはじまっている。「校長は親であり教師は子である」。

——ぼくは教師っていうのは出世なんてことはあまり考えない人がなるんだと思ってた。子どもがすぎだとか教育への情熱とかね。ところが意外に出世したいという人がおおいらいんだね。なんてかな。出世しようという人なら民間企業にいったほうがよっぽどいいでしょう。

それは家族の目と世間の目というのがかなりきつくなるんですよ。その人にとってはね。でも、女の先生がたにはすくないですよ。うちのおやじだつて、ぼくが田舎にかえるでしょ、そしたら「おまえ主任になったか」ってかならずいうからね。「教頭の試験はまだか」とかね。そういう期待ばかりもつてる教師を「平目教師」という、天井ばかり見てるから。最近若い連中になればなるほど……

——平目か。若平目だね。

身だしなみなんかもキチツとしてるしね。かならず背広にネクタイ。

——黄金よりも、田舎の家族の目とか、そっちのほうか。

黄金なんて大差ないですよ。でも最近はずがってきましたね。当初は校長とヒラの二段階だったのが、つぎに校長と教頭とヒラの三段階になって、これから早晚やってくるのは、校長、教頭、主任、上級教諭、下級教諭——この五段階にわけようというのが文部省の方針ですね。いまは四段階——特一号給というのが校長。一号給というのが教頭で、われわれは二号給なんです。あと臨時採用とか助教諭とかが三号給ですね。

——足のひっぱりあいなんかもあるの？

それは研修の問題にからんでかなりシビアにでてくるんですよ。要するに出世しようとする、なにか手柄をたてなくちやならない。これは昔からよくあることで、たとえば教務主任をなんとか教頭にしたいと管理職が密約をかわす。そうすると果からなにか問題を依頼してもらって——たとえば同和問題とか給食指導とか、教科だったら図工とかなんとか、それに全校でとりこんでイッパツ火花をぶちあげてね、その推進者のトップに教務主任をもって

長が朝、ぜひみなさん、子どもたちの眼もあることですし、人に不快感をあたえない服装を心がけてください、女の先生はいつも美しく清潔であるように、とイッパツぶつんですよ。われわれは、そんなのどうでもいいじゃないかと。

——子どもからみれば、ジーパンとかヒゲはやしてるとかさ、そういう教師をどう考えてるのかな。

子どもは多種多様ですよ。おのれとウマがあうかわないかの問題ですよ。ウマがあれば、みにくいヘア・スタイルであろうが、それはどうでもいいんですよ。

——だけど若い教師たちがムサくするしいのをいやがるよとすると、それよりもっと若いのがいまの子どもじゃないか。そうすると子どもの段階からそういう選別はないかね、きたないとか、きちんとしてないとか、オシヤレじゃないとか……

それはものすごいですよ。

——横浜の場合は、あいつはきたないからって、それでぶつ殺しちゃうんだろ。

くるわけ。教務主任の指導よろしくということになれば……

——全校で一致してとりくむってやつね。バレーボールみたいなもんだな。みんなでない球をあげてやって……。そうすると子どもたちはその「教育実践」の研修にむけて教育されるわけでしょう。

材料にされる。それはもちろん「子どものために」ということですよ、タチマエとしては。でも実質はそうじゃない。子どもが研究の材料にされる。医者とおなじですよ。

貧しいことはきたないことだ

——さっきの話にもどるけど、石毛さんみたいなのが面白いとしてダメだとすると、オレたちももちろんダメだよな。不精ヒゲとかさ。

まずダメだね。ヒゲっていうのはよっぽど変り者ですよ、学校のなかでは。こういうふうには頭バサバサにしているのか——去年、埼玉県の教育庁から各校長にあててこういう発令があつたんですよ。このごろ研修にでてくるときに、ジーパンやサンダルをはいてくるバカがいると。それで校

ゴミ掃除だからね。そういうの、ありますよ。ある朝ね、ぼくが学校にでていたら、むこうからのすごい勢いで走ってきた女の子とすれちがったの。あのととき六年だったから、いま中学二年、いや三年になったか、やつらは。そいつが、ぼくが「なんだ、お前！」っていても、わけもいわずに走りさつたのね。で、教室にいつて、「おいおい、あいつどうしちゃったんだよ」ときいたら、机のヒキダシのなかからカビたパンがでてきたっていうんだね、かびパンが。

かびパンについて、ふつうの連中はそうとうの嫌悪感をもってるわけです。下品なもの、とくに不潔ということをおそろしいほど意識するんですよ。たとえば給食の時間に他人がちよこつとも手をふれたら、もう食わないからね。落つこつたものなんかまず食わないですよ。で、しようがない、じゃ俺が食ってやると。

なにしろそういう状態なんで、かびパンが偶然みつかったて追究されちゃった。「女の子でしょ、それくらいいやんと整理整頓できなきゃしょうがないじゃない。もつとしっかりしなさいよ」と、やつらにいわせれば助言したっていうんだね。指導助言したら怒って帰っちゃったと。しかし、ちがうんだね。あんたとあたしたちとは生活のレベルとい

うか様式がちがうんだという意識があるんだね、裏に。

一戸建ち派とマンション派とアパート派というのがあって、アパートにすんでると悲劇ですよ、いま。「お前んちきたねえな」って露骨にいうからね。その子は母子家庭だったんですよ、母親が離婚しちゃって。ぼくとはワリとうまくいってた子なんだけど、ぼくがいつてもドアをあけてくれなかった。思いつめちやって、たたいもせんぜん返答がないのね。「こりやまずい」と思ってね、お母さんの仕事場に電話して事情を話してね、帰ってきてもらった。あとでいったら、こんどはちゃんといれてくれてね、「あたしは自分のだらしなさをいつも自覚してる。だけれうまできないんだ」と。それを女が十九人ぐらいで集団的に糾弾されたんで、いたたまれなかったらしい。彼女、勉強もあまりできるほうじゃなかったし、それに母子家庭だという生活的なハンデがかさなって、それがワツと突出して逃げるように帰ったんでしょね。

——学校で美化運動があるでしょう、アキカンをひろろとか……

ありますよ。それも校内ならいいんだけど、駅前掃除やからね。子どもの特別活動というのがあるでしょう。た

ええ、そういうふうになる可能性はあるんです。忠生中学とかね。あれは教職員の意識の問題だと思っただな。パトロールの問題にしても、ぼくはまえの学校では極力反対してききましたから、辛うじてやらずにすんでいたけど……

#### 誠実に管理する先生たち

——そういうことにたいして組合はぜんぜんタッチしないわけでしょう？

タッチしないっていうよりも、逆に自分で担っちゃうんですよ。統一労組懇の問題なんかもあるんでしょうけど、日共系の組合の連中は「教師はプロである」と、専門職である、もつとバカなやつは「聖職だ」というのね。「勤務時間なんかどうでもいい、子どものためならなんでもやれ」っていうことになってるから、歯止めがないというのか、これ以上やったら学校全体がおかしい方向にいくんじゃないかということすらわかんなくなってる。管理職でさえ「そこまでやるのはやめてくれ」というところまで、自発的にやっちゃうんです。

これらの理論は集団主義教育理論といって、竹内ながしの全国生活研究会というのがあります、その支部とし

とえば飼育委員会とかいうやつさ。あれをどう管理職がとらえているかっていうと、「奉仕活動である」という考え方ですよ。

——なんにたいする奉仕さ？

学校全体にたいする奉仕ですな。

——校長が校庭でゴミをひろって歩くとか、そういう話もよくきくけどね。

ぼくのまえの校長は「ひと声運動」の推進者で、子どもが登校する直前に危険な道路のすみに立って、「お早うございます」って声をかけるのね。教頭もしぶしぶおつきあいやってた。そこをいつもとおっている人にいわれたんだけど、「校長が何年も元気に登校する子どもたちに声をなげかけているのに、ほかの先生がたはだれひとり立っていない。ふしぎな学校ですな」と。ハッハッハ。「あ、すいません、どうも」なんて。

——でも、そういうのがひとり立ち、ふたり立ちして、そのうち全教員が……

て埼玉全生研というのがあつた。そこでやられている生活指導というの、ソビエトのマカレンコの理論をバックにしているんだけど、人間個人というよりも集団のなかの個人という考えがつよくあつた。子どもたちをグループ分けして——だからニッサンとかなんとか、自動車会社の管理のやり方をうまく導入してるわけですな。

——小集団活動ね、QC運動の。小集団できそいあわせ

その学校版ね。だいたい職員室のなかがそうなんだから、当然学級がそうなるというのはよくわかるんです。主任制ができてしまったので、職員室のなかも三角形の小集団にわかれてるから。原則的にはみとめていないとかれらもいってるけど、民主主義的な主任ならみとめましようというところで、互選するんですよ。たとえば六年の先生が五人いれば、話し合いて主任をきめて、民主的だからいいじゃないかという。それも連絡調整の機関というふうにとらえてくれるればまだいいんだけど、そうじゃなくて、権力機構のひとつなんですから。

——教師というのは基本的に教室のなかをシーンとさせ

て、自分が好きなようにおしえていくというのがいいんだらうから、子どもが自分で管理をきちんとしたほうがいいんだね、たぶん。

教師にとっては楽ですよ。楽っていつちやうと世間において具合わるいんでそういつてないけど、管理すればするほど楽です。管理が徹底すれば言葉もいらなくなる。手をひとつ叩いたら気をつけ。ふたつ叩いたらお坐り。みつ叩いたらワン。笑つちやうですよ。本当にそういうふうにして集団をうごかす方法があるんです。それを組合がささえる。ぼくなんかふざけて「そんなの民主主義的なフアンズムじゃないか」といつもいうんだけど、実際にそうなんです。子どもだから廊下でどなりたくなるし、そんなの当りまえですよ。ところが廊下のとらえ方がまずちがうわけですよ。かれらは廊下を一般の道路とおなじようにとらえて、まんなかに黄色い線なんかをいれて、右側通行だつて。ぼくはそんなのとつてくれといったの。廊下なんか解放区だからね。で、ぼくの教室のまえだけは歩行者天国にしてね。バリエードつくちやうって……そうふうにやったこともありませんたけど。だいたいヒンシユク買つちやうたけど。

だからいまの世の中をほんとに見事に反映してるなと思うけど、外見のちがいはあるけど、中味はまったく画一的なんです。そして、ものごとを決めるいちばんの前提とされて

とまれという記号なんです。とまって左右を見てから出る。ハッハッハ。ぼくなんか、子どもにそのときどきの判断力をやしなわせるのが学校教育だと思ってるんだけど、そうじゃないのね。ルールにしたがつて生きるということだけのね。

——学校が社会につながっているっていつても、管理に順応する人間をどんどん生産するとかぎりてそうなんだ。そのことを教師たちはぜんぜん疑問に思っているの？

思ってたとしても、ホントの少数派ですよ。ぼくの知っている親たちにいわせると、ひとつの学校に一人か二人しかいないでしょうから、そういう先生を大事にしていかなきゃいけないんでしょうねと、そういう話なんです。

——いま石毛さんが所属してる組合というのは日教組とはちがうんですか。

ちがいます。日教組にはいつてた連中が半分ぐらい。はじめから日教組にはいつてない連中が半分ぐらい。多少のズレはあるんだけど、要するに大きな組織のなかで内部批

るのが「共通理解」というやつね。これ、くせものだと思うな。

——ナショナル・コンセンサスね。

あれかこれかの選択の余地しかないような問題の設定をしておいて、たとえば「子どものために校外パトロールをすべきだ」というような発想にすぐなるわけ。ぼくが「そんな警察のやるようなこと教師がやっちゃやまずいんじゃないか」といつても、「子どもたちの将来を考えればやるべきだ」ということに、ナショナル・コンセンサスとしてはすぐなつちやう。それでもぼくがひとりてバカみたいなことをついてると、若い連中はシラけちやうわけね。そういう異化効果は多少なりともあるのだけれどもね。

さっきの廊下の歩き方の問題でも、それが細部にまでわたると、じつにコッケイなことになる。学校の場合はなにごともそうですが、マンガチックになるんです。

教室の扉のまえにね、足型をおいとくんですよ、まえとうしろ。生徒はまえからはいつちやいけけないという鉄則があるらしいんです。まえは教師専用。自分の子どもたちに「先生、まえからはいつていいんですか」といわれて、ぼくははじめてそのことに気づいた。その扉から廊下に行くとところに足型がピシッとおいてあつて、そこでいつたん

判的にやつてても、自分のためにならんわというのがほとんどなわけ。埼玉教育労働者組合といつて、四年まえにできたんです。

——そういう組合は全国的にあるんですか。

横浜にひとつ。あと兵庫に自立高教組という高校のグループ。この三つですね。事務職はいろいろありますよ。われわれよりも横のつながりはあるし、組織的にもしつかりしていますね。

——ふつうの事務職は日教組にはいつてるわけ？

はい。非組合員の事務職、日教組の事務職、少数の学務の事務職と、いまは三つある。

——それは日教組批判からはじまったの？

そうですね。一九七四年に悪名たかい人材確保法というのができて、教師と事務職の職種間の差別がおこなわれたんです。日教組はそれをのんでしまったという経緯があつて、賃金的にかなり格差があつた。教師は子どもたちをお



しえる専門職である。それにみあった給料をあたえなければ世間が許さないだろうと文部省がだしてきたものを、多少の批判は日教組のなかにもあったらしいんだけど、最終的にはそれをみとめたかたちになつてゐるんです。

——文部省の方針としては、ほかの公務員より高い賃金を払って不満を解消するというのが狙いであつてね、むしろから見ればそろそろポデイブローがきいてきたという感じがな。

事実、教師のなかでは一般的にいい給料をもらっているという感触がつよいんじゃないかな。ぼくはそうも思わないだけ。

——いま石毛さんは三十六歳か。三十七歳で教師の賃金についていくらなの？

基本給で二十万。

——じゃ全通より国労よりいいわけだ。全通で十何万くらいでしょ。でも、ほかが安すぎるんだな。そんなにべらぼうにいいわけじゃない。

とやれ！」とどなりちらすんです。

——それは体育大学出身？

埼玉の場合は旧師範出がおおいんですよ、埼大とかいまの学芸大とか、小学校の場合はね。中学・高校になると、ひとの話によると体育系がおおくなつて、そういう連中じゃないとおさまりきらないという状態になつてゐるらしいです。やつらに子どもたちを押さえてもらつてゐるもんで、批判ができなくなつちやつてゐる。

——小学校ぐらいだと、教師が子どもをぶん殴るといふことは……

日常茶飯事です。そういう連中のあいだではね。

——まだ教師のほうがつよい。

女の先生だつてまだ勝てるですよ。でも女の先生も近頃やばくなつてきた。授業ホイコトなんてありますからね。音楽教室にはいらなくて、女の子たちが廊下にならんで歌をうたつてるとかね。

ええ、冗談じゃない。ぼくの場合、すぐまえの会社とくらべちやうからまずいんだけど、四万は安い。しかもスライドがぜんぜんちやうでしょう。定昇が何等給何号つきまつて、ベースアップは人事院勧告できまつちやうから、もう先が見えてゐるんです。賃金のライフ・サイクルが、ハッハッハ。おもしろくもなんともない。最近では五十八歳以上は定昇なし。ベースアップなし。新任の教師は一号給ダウン。

で、どうなんでしよう、スト権をみとめられたとしても、団体交渉の席上で賃金がきまるなんてちよつと考えられないうでしょう。最近のご時勢では。だからスト権もらつたつてしようがないなんていつてる。

ウンチ・コンクール

——右翼的な教師つていふのはふえてる？

イデオロギー的な右翼というんじゃなくて、子どもにたいする管理という面ではかなりどぎつくりありますね。たとえば朝の朝礼で、軍隊式の整列・行進を週に二度はやるんです。そのときに「足の上げ方がわるい！」とか「キチッ

——そうなると根本的には学校教育とはなにかということにいつちやうんだよね。教師が職務をまっとうするために、やつぱり生徒を自分の号令にしたがわせたいということがあつてでしょう。

それは自分の授業を子どもにわかつてもらつたための方便として、管理的な色彩がつよくなると思つてますよ。ところがその本来の目的を忘れて、方法に腐心してゐるのが現状なんです。いまは教育実践に埋没してゐる先生がほとんどなんです。それはいつてみればレールの上を走つてゐるにすぎないでしょう。文部省でだしてゐる虎の巻にしたがつてカリキュラムをどうこなすかという方法に苦心しすぎちゃつて、じゃあなんのための教育なのかという大前提がスポンとぬけちやつてゐるんです。

——松戸の場合、これは日共系の組合の青年部長なんだけど、ウンチ係というのをつくつてね、けさウンチしてきた者は手をあげろといわせるわけ。それで手をあげるために、毎朝、便意がなくても五分間はトイレに坐つてがんばるわけ。がんばりきれない奴は教室で手があげられない。そうすると手をあげるやつがだんだんふえてく

るのね。だけど工場なんかでさえ、毎朝のミーティングで職制がウンチしてきたやつ手をあげろなんていわないぜ。生産性を至上命令としている工場でさえ、労働者の生理現象を完全にコントロールしようなんて、したくてもしないよ。できないからね、まずいから。ところが学校ではそれをやるのね。しかも文部省の方針ともちがうっていうのね。教師が自発的に——それも日共系の組合の青年部長とかがそういうことをやって、ぜんぜん疑問を感じないというんだからね。

ある小学校では「排便コンクール」というのをやるんですよ。静岡の中学校でも問題になったけど、コンクールをやって生徒にウンコを自主管理させるんですよ。まず色艶形状——細目にわたってチェック・リストがありまして、優秀な者には排便優秀賞というのをやるんです。それを全校あげてマジでやる。それに歯みがきの自主管理ね。まるごとの生活管理——そういう事態が進行してるとね、最近の身体検査というのは昔とはぜんぜんちがってね、細目にわたってやるんですよ。行政的な考え方のレベルをとびこえて、先生がたは研究熱心だから、つまらないことまで自発的にやっちゃうんです。たとえば体重測定は毎月やるし、あと体育系の連中がやってくる体力向上推進運動と

らいに賞状を刷ってやるわけだよ。そんなこと戦前にもなかったよね。

先生のほうも外れることをおそれる。外れてるやつは二つの世界を同時に見てるわけですよ。ふつうの世界と外れてる世界。だから相対化できない。そういう現点がないんだね。

——そうそう。だからぼくはいちど社会にでてから、先生になったほうがいいと思うんだ。いまは先生は純粹培養でしよう。ぼくらが子どものころは、そんなにすぐれた教師がいたとも思わないけど、すくなくともいろんな種類の人間がいたよな。

いまはみんな似かよってるのね。風貌もそうだけど、パ一ソナリテイも似かよってる。だからおもしろくないのね。たとえば全校の「共通理解」で、廊下を走らないようにしようってきめるでしょ。ぼくなんかそれを破るでしょ。そうすると「どうなってるんだ。いったん決まったら、まもるのが民主主義だろう」ときめつける。それは文部省の思う壺なんだろうけど、文部省だっておもてだつてはそこまではないですよ。だからぼくはそれを「感性自主管理」とよんでるんです。

というのがあって、埼玉県は全国的平均からみて体力がおとつてると。だから毎朝マラソンをやらせるとか、二時間目と三時間目のあいだに体操をさせるとか。そのとき反対する先生が子どもを外にださないし自分もでていかないと大問題になるんです。

——健康な人間の基準をつくって、その基準からはずれたら、お前はみんなとちがう、はやく基準どおりの人間になれというわけだな。しかも文部省や教育委員会の強制じゃなく、先生がたが自分でがんばっちゃう。

戦前の子どもが軍国少年になったように、子どもはおだてればすぐがんばっちゃうんです。ブタもおだてりや木のぼるってわけだね。いちばんいい手なんです。おだてて、ほめあげて、リーダーをつくってやって、競争させて、お前はがんばったなんていっちゃって、賞状の乱発がすごいんだから。あとシールとかね。わるい子にはゴキブリ・シールなんか貼ってあげたりしてね。「あんたががんばりなさいよ、王冠のシールあげるからね」と。

——愛知県のある学校では、毎月皆勤賞をだすのね。そうすると先生はたいへんなんだよ。なにしろ千二百人ぐ

とくに若い女の教師でびつくりしたのは、忘れものをしたときの罰のあたえ方のすごさね。これはすごかった。「私は先生の再三の注意にもかかわらず、とうとう十回も忘れ物をいたしました」というゼッケンをさげさせて、学校中をまわらせるの。ナチがやってたでしょう。ああいうやつ。ぼくは彼女をとつかまえて洞喝をかけた。そしたら「すみません。どう意味をもってるか、私、気がつきませんでした」。っていうんだよ。「これから気をつけます」。って。学校でたての若い教師ですよ。そんなの自分のアイデアじゃないですよ。どっかでおしえられてきて、それを実行したんですよ。

そりや年よりのおもしろい教師が、「この野郎、パンツひとつでグラランドまわってこい！」とおこっているのはユ一モアあるけど、これは陰徴ですよ。おそろしいですよ。

「おじちゃん」から「先公」まで

——そういうのにたいして、子どもの反応というのはどうなの？

かならず見ぬきますね。そして荒れますね。そりやぼくは、子どもは捨てたもんじやないと思う。ある小学校で

つけてるから、廊下を走ったやつ番号をかくれてノートにつけるんですね。まるでネズミとりですよ。それを生活指導の先生にわたすと、こんどは生活指導が担任にたえるわけです。そういうふうには子どもたちを相互監視させつつ管理する。

そのとき子どももさるものだなと思ったのは、なんでも黙ってやれ、黙食黙動っていうのが原則なんだけど、掃除のとき、便所掃除が子どもたちにはいちはん人気があるんです。なぜならドアをしめれば、そこでふざけられるから。

——わア、陰徴だな。昔の兵隊がトイレで文庫本をよむみたいなんじゃないか。そこまできてるんだな。だとすると、小学校っていうのがいまの日本のなかでいちばんすさまじい場所かもしれないな。

うん。だからぼくは学校が荒れてるとか、非行問題とかすごく評価してる。逆説的に。あれよりもっと陰湿なのが「いじめ」の問題だね。こつちのほうがもっと根がふかいし、なかなか見えてこないからね。

これは親の問題がからんでる。親の差別観がきちんと子どもにのこってるのね、上福岡の林くんの自殺なんかでもそれに経済的な階層性がかつきりしちやってる。ぼくの経

は戦前以上の管理的な実践をやってるけど、週番で子どもたちに相互点検させるんです。たとえばみんなゼッケンを遊んで、それが子どもにもモロに反映するんです。一戸建ての子は家にだれもいないから塾に行く。

——どうですか、これからさき教師をやっているって、どこかで行きづまるような気はしない？

子どもの問題で行きづまることはないと思うけど、制度上の問題として、非行教師とか斜めにかまえてる教師はだんだんいなくなるでしょうね。そのときどうするかという、やめるか窓ぎわになるか、あるいは少数組合をつくってがんばるか、そんなに手はないと思う。

——でも、そういう教師が一人でも二人でも学校にいるということ、子どもにとっては大きいわけだな。

大きいと思いますね。まえの学校では、ぼくなんかダラダラつくってきたから管理的な要素がすくないけど、いまの学校ではまず子どもがダメですね。五年間やられて、のびのびしていない。いじめて自己規制がおおい。表現が下手くそです。

験でいうと、マンションのとなりには平屋の長屋があったんですよ。その長屋のやつに電話がなかったんです。ところが学校ではかならず緊急連絡網というのをつくるんで、となりのマンションのやつに、なにかあったらお前が走って行ってあいつに連絡してこい、っていった。そしたら「先生、ぼくダメです。お母さんがあそこには行っちゃいけないっていうんです」っていうんだな。その場所というのはヤーさんふうのがいて、世の中から見れば暗いとこなんです。で、「お母さんがいけないからって」と見事にいつてくれてね。「あッ、そう。だったいいよ」ってことわったけど、なるほどなと思った。

——みんな中流という意識の反映なんだな。

中流意識でも、そのなかのわずかな差にすごく敏感なんだね。だっておなじクラスでトイメンの家にすんでて、親どうしが口をきかないから子どもも口をきかないんだもの。おなじような家のつくりだし、おなじような暮らしぶりだけど、そこに多少の差異があるんでしょう。課長と係長とかね。気持に余裕があるのが、意外と一戸建てよりマンション派なんです。一戸建てはローンに追われてるのかもしれないけど、共稼ぎがおおい。マンションだとお母ちゃん

——だいたい学校にはいつて何年ぐらいでそうなっちゃうの？

四年ぐらいです。一年からやられて、四年ごろからポツポツと。ぼくがグラウンドにいたら一年生がきて、シャツをひっぱって「おじちゃん」っていうのね。それが六年になると「おい、先公」だからね。それがいまの学校なんですよ。

## 二等車で

## スラチャイ・ジャンティマトン

スラチャイは、一九六五年、十七歳のときに、いとこのサティアン・ジャンティマトン（作家）をたよって、イサーン（東北）の故郷からバンコクに出てきた。三等車に乗って……美術学校に学びたかったためだ。この作品は一九六七年のもので、彼が短篇小説を書きはじめた最初の年の作品である。（訳者——莊司和子）

その列車は、ウボンラーチャタニからバンコクに向かっていた。三等車の中ですしづめになつてきた人びとにとっては、もうずいぶん長く走ってきたのだ。ちやうど、ドンパヤーイエンの谷にさしかかったところで、夜の闇と息苦しさからぬけ出して、さわやかな朝を迎えていた。両方の窓ぎわには、あきもせずじつと景色をみつめている人たちがいる。谷には霧がただよっていて、涼しげな緑の山並みをつつんでいた。草や木の葉に残った露が、ひんやりした潤いを送ってくれる。窓から首を突き出すと、強い横風が顔にぶつかってくる。ある者にとっては、それが胸を刺す痛みに感じられるのだ。誰も同じことを考えているわけではない。けれどもほとんど誰もが、バンコクに何か目ざすものがあったのだ。

列車が駅に停まる度に、簡単な食べ物や、朝食用に買いこまれる。包んであったバナナの葉や、ビニール袋、鶏の骨などがビュンビュン窓から飛び出していく。まるでみんながしめし合わせておいたみたいだ。

その三等車の中は、まだ乗客でぎゅうぎゅうのままだった。立ったままの者もたくさんいる。もう一〇〇キロ以上もずつと、しんぼう強く立ち続けているのだ。きゅうくつな座席で老人がまだ眠っている。すっかり眠りこけているようだ。みつともなく口を開けたままで。どの顔にも疲労の色がにじんでいる。

誰もがそれぞれ違った服装をしていた。違った靴をはいて、皮膚の色もそれぞれに違う。座席によつては、ひと家族で占拠されている。母親と父親と子供たちだ。彼らは交替で立ったり坐ったりしている。一番いい方法には違いない。網だには、いろいろな大きさのカバンや荷物が、びっしりすき間もないほど積みこまれていて、それでも入りきれないものが座席の下や、通路にまではみ出してきているのだ。

三等車の中は、新天地を求める移民の一団といつてもよかつた。誰にもそれぞれのわけがあるのだ。待っているこの時間、はしやぎ騒ぐ子供たちの声がある。

食堂車の従業員が、ジュースやチャーハンを入れた籠を下げてまわってくると、人びとは先を争って買い求めたので、三つめの車輦まで行きつかないうちに売り切れてしまった。誰もが空腹で、喉の乾いている時間なのだ。

飲物で喉が潤ってひとしきりするころには、そこかしこで話し声があがる。ラオ・イサーン語（ラオス系東北方言）だったり、タイ語だったり、かん高いクメール語だったり、話しこんでいるグループごとに、違った発音、違ったアクセントが聞こえてくる。

若者たちの集まっているところでは、彼らが行ってきたことのある、バンコクの売春宿の話をしている。今度が始めての者は、まだ見ぬバンコクにそぞろ空想をかきたてられるように、じつと聴き

いっている。彼らのスタイルはいえ、彼ら流に最新流行で一番素敵だと思ふかっこうをしているのだ。髪はポマードでなでつけ、きちんと櫛でとかしつけてある。たいていは、派手なカバンをひとつ持っていて、選んだあげく入れた二、三枚の衣類が入っている。それから、汽車賃を引いた残りの八〇パーツ、それとも九〇パーツか一〇〇パーツ。バンコクに着いた当座使うためだ。それを使いはたすころには、何かしらの労働で賃金をもらえることになるだろう。一ヶ月に一〇〇パーツとか、二〇〇パーツとか。これは、彼らにとつては、少なからず誇れるほどの大金なのだ。

「あんたをだんなのところへ連れて行くからね。今晩さっそく仕事させてもらえるようにしてあげるわ。だんなのところにおいて、食べさせてもらって、月いくもらえるか、それはだんな次第なのよ。あたしは三ヶ月いて、こんど家へ三〇〇パーツとちよつと持って帰ったわよ。あんたを連れてくるって言うておいたら、あたしに汽車賃くれた。とにかく、あたしを信じなさいよ。あたしについて歩いて来るのよ。バンコクってところは車がいっぱいで、しよつ中ぶつけられるんだから」

真黒に日焼けして荒れた肌の人たちの中に混って、目立ってきれいな身なりをして顔だちの整った若い女が、こう言った。聴いている方には、ためらいの表情がよぎり、瞳には不安のかががあった。

汽関車はいいかわらず同じリズムの音をくりかえしながら走っていた。登るときは、まるではいつくばって進むようだし、下るときは、矢のように速く走る。カーブにさしかかると、先頭の車輛の乗客は、最後尾の車輛が見えるし、最後尾の車輛の乗客にとつても同じことだ。そうすると彼らは手をふりあう。何のために手をふりあうのか、答えられる者はいない。そしてさらにはほほえみ交わすのだ。それまでに一度も知りあつたこともないのに。

食堂車では、ほとんどのテーブルで酒がくみかわされている。相当長いこと飲んで連中は、もう大部酔つて目がとろけそうになっている。つつぶして眠り続けているものもある。立ち去つたテーブルには新しい客が席について、ビールが注文される。誰もこれ以上きれいな空気を欲しがつていないようだ。ウイスキーと冷たい炭酸に、暑い日ざしや風が当たらないようにか、窓を閉している。それ

とも、ありきたりのグラスの中で泡だつうまそうなビールの香りのためにか、中年の男と若い男が、つまみを前にウイスキーをちびちびやっている。

「ぼくはいろんなところで、ずいぶんひどいことを見てきた。たとえば県内のバス路線の独占的權益あれは民衆をしめつけるだけで、悪どいやり方だ。ぼくらはまるで豚か犬みたいに、つかまつて首ねっこを押えつけられてる。今までだつてこういうふうな暮らしてきたわけなんだけど、感じたことがなかつた。でも今は違う。どうしてだか分らないんだけど、感じてしまふんだ。ぼくは、何かひとつやれることはないかと思つてる……」

若い方の男が、手をあげながら真剣な表情で話している。中年の男はい変らず黙つたままだ。それからグラスをとると、チビリと一口やつてから話しはじめた。

「それじゃあ書いてごらんさい。いくつかの新聞が喜んでみてくれるから。君の問題提起が、ただ罵倒するだけじゃなくて、しっかりと根拠にもとづいているかどうか、それだけが心配だな」

「以前聞いたことがあるけど、現在の新聞は資本家の指示どおりにやらなきやならない。資本家とは要するに内閣の人間で、彼らも民衆に自己PRしたがつている」

「ま、そんなもんだよ、君。誰だつてまず第一に民衆の支持をとりつけないに決まつてる。政府というのは、その国や国民に善意を持つてゐるものだ。悪意をいだいてゐるとしたら、なんて為政者の地位につくものかね。少なくとも罪をはじめるころがあるよ。政府はたつた一人の人間でなりたつてゐるわけじゃないよ、君。それにすべて完璧にいい政府なんて、どこさがしたつてあるわけがない。わたしたちが話すことを許されているのは、この程度のことだよ。いったい君は、どの程度までを望んでいるのかい」

「今のお話は政府のことでしょう。ぼくの言つてゐるのはそういうことじゃなくて、村や町のこと、バス路線の独占權益のこと、薪火で暖をとつてゐる百姓たちのこと、そういつたことですよ。何がどうあろうと、そういうふう生きて、やがて死んでいくだけの。教育とか医療とか、役所からの恩恵と

かでいえば、農民と商人とはまるでバランスがとれていない。そうじゃありませんか」

「どういうわけかね」

「ぼくにはまったく分らない」

「金のせいでよ、君。それにタイ人は変化を好まない性格だ。何か強い衝撃があった方がいい。このごろは君みたいなのが多いな。さあ、もっと酒でも飲んだ方がいい」

汽車は、倦怠の響きとともにまだレールの上を走り続けていた。サラブリを過ぎて、さらにいくつかの駅を過ぎるころには、すっかり午後になっていた。左右の車窓には、みわたす限りの水田が広がっている。通ってきた山々は、もうはるかにかすんでしまった。暑い日ざしが涼しい風とともに入ってきて、誰もが眠くなりはじめている。座席にもたれて、もうすっかり眠ってしまった人びともいる。車中は少しすいてきたし、食堂車で酒を飲んでいた各テーブルにもけだるさがただよい、誰もが卓上に顔をうずめて眠っている。バンコクに着いたら起こしてくれるよう、ウェイターに頼んであるのだ。この列車に乗り合わせた誰もが皆、バンコクに希望を託して揺られていく。

汽車がアユタヤを通るころには、日は大部傾きかけていた。はるか遠くに見えてきた、くずれかけた塔の遺跡をながめやる人びともいる。こんなに離れた車中からは、朽ちはてた小屋も同然の姿だ。せいぜい、学校で習った歴史を思い出すくらいのことだろう。

汽車がドンムアン駅に停車した。ここではもう降りる人たちがいる。車中では誰もが飛行機に目を奪われている。ちょうど離陸しかけている飛行機もあって、耳をつんざくような音だ。生まれてはじめて飛行機を目のあたりにした者にとつては、忘れがたいほどの光景だ。もう眠っている者は誰もいない。汽車は、次のバンズーに向かって走り出していた。

「何を考えこんでいるの？」

顔だちの整った美しい若い女が口を開いて、窓の外をぼんやり見るともなく見ている少年に声をかけた。「うちのことを思い出しているんです」

少年はこれだけ言った。膝の上には、黒いまだら模様の小さなよれのバッグがあった。

「あなたは勉強しに来たのね」

彼女は言った。

「はい」

彼は答えると、彼女の方に向きなおった。彼女は街の人のように美しい。彼はそれ以上想像するのをやめた。

「わたしもうちが懐しくつてね。でも帰ってみると、こんどはバンコクのことを気がかりなのよ。こちのうちのことや、仕事のことや全部ね」

彼女は少年にはほえみかけると、手に持っていた紙袋を開いて、すすめる。

「お菓子をおあがんなさい。さっきアユタヤで買ったの。おいしいから」

「どうもありがとう」

バッグを握っていた手をはなして、彼は菓子をとった。長い沈黙のあと、少年は顔をあげて彼女に告げた。

「ぼくはもう降ります。ほうすぐバンズーだから。あなたはフフランボン（バンコク中央駅）まで行かれるんでしょ」

「そうよ」

汽車はプラットホームに停まった。少年が降りると、その若い女はにっこり笑って手をふった。汽車はまた動き出した。彼は、その女が笑ってくれたので、なんとなくほっとしていた。そしてそれっきりもう何も考えなかった。バスに乗ることで頭がいっぱいだったから。

彼はまた押しあいへしあいしてバスに乗りこんだ。風がなくて蒸し暑いひどい季節だ。バスの臭い、あらゆる物の臭いが吐き気をもよおすほどくさい。彼はこれがバンコク特有の臭いであることに気づいていた。バンコクの臭い、コンクリートの臭い、よどんだ運河の臭い、彼が吸わねばならない人間の臭い。これがバンコク一の気つけ薬で、彼の目を覚まさしていることを。

# 北海道の水牛ひとり旅

福山敦夫

四月三十日、札幌のメーデーに呼ばれて、ひとりピンとチャランゴをかかえて出かけた。なかなか水牛楽団五人を呼んでくれるチャンスがないので、ひとりでも歌って歩こうと思っていた矢先なので喜んで出かける。

五月一日、九時ごろ札幌大通公園の会場へ行く、考えてみるとメーデーに参加するなんてのは生まれて始めてだった。さそわれたこともないし、行こうと思っただけでもなかった。

会場には、主催者発表で五万五千人とっていたが、とにかくすごい人出だ。ついこの間の選挙で、革新知事が誕生してメーデーもいっなくな盛り上がりつつあるのだろう。

集会前のアトラクションといった感じで頼まれていたので、先ず知事誕生のお祝いを申し上げてから歌を歌う。

誰もきいてなさそうだった。

いつもわりときいている人の目を見ながら歌うようにしている。こつちを見てくれる目をさがしたのだけど、やがてあきらめた。

みんなあさつての方を向いて話をしているのだ。あまりしゃべらずに歌だけ歌うことにした。

人と水牛、白いハト、宣言、ありがと、いのち、奪われし野に春は来るか、トライデン・サブマリン、フジムラストア、とにかく孤独な水牛はイントロも間奏も口でやらなきゃならない。

何をやっても何の反応もないので気持ちがしばみそうになる。不思議なもので、こんなに多勢の人の前で歌うにしても何の関心も持たれないとなるとかえって気が楽になる。

しかし、むなし気分分て舞台を降りた。

十三日にまた北海道に呼ばれているので、いったん東京へ帰るかどうか迷っていたのだが、帰っても何もすることがないので、知り合いの家を転々として居ることにした。

定山溪に近い日音協の的場さん宅に行く。的場さんの家で始めて山わさび（野わさびとかいろいろ呼び名があるらしい）を食べた。庭にいっぱい出来てしまっただけで捨てるのだという。もったいない話だ。このわさびは、静岡あたりのいわゆるわさびと違ってどこにでもどんだんはえてくる生命力の強いやつだ。東京でわさびなんて一本七百円位して、とてもおいそれと食べられないのに。このわさびを三里塚に植えて、ワンパックの中に入れてもえるといいんだがなと思っただ、どうかなあ。

五月二日の晩から、岩見沢の村雲孝宅に居ようろうする。何もすることがないので終日ゴロゴロと寝をべり、村雲さんちのネコと兄弟のような自分に気がついた。見るに見かねてか、彼の友人宅へ連れられて行く。夕張の外尾宅に呼ばれて、小さなパーティーをしてもらって歌う。夕張は始めてだった。去年の事故の事、強制労働の事など、いろいろの事が胸をよぎる。もう一度ゆっくり来てみたい町だ。七日の夕方、村雲さん、外尾さんなど四人で出している

同人誌、「あとらんだむのおと」の出版記念パーティーに招かれる。めいめいが、それぞれ勝手なことを書き、お互いの批判はしないという約束で作っている二十数部ほどの同人誌だ。好きなことを楽しそうに活き活きとやっているのを見るのはいい。

八日から、札幌に戻り、詩人の江原光太さんのところへ転がり込む。江原さんは若い友人をいっぱい持っている。若い人を大事にするからだろう。僕も大事にされた。毎晩二時、三時と、とにかく良く飲んだ。

十日に北大のそばのミニコミ喫茶店「ひらひら」で、フリピンへ行くアジアの女たちの会の藤田さんの壮行会があった。歌う。

二十人位の人が集まっていたが、こういう所で歌う方がつとよい気分だ。

翌十一日は、同じ「ひらひら」で、江原さんたち詩人仲間が十数人集まって詩の朗読会がひらかれた。詩の朗読の間に入っていくか歌う。九時に終ってみんなゆっくり話でもするのかと思ったら、みんな帰ってしまった。大体の人が車で何時間もかかる所から来ているかららしい。北海道は広いのだ。

十二日は江原さんが東京の新日本文学会の総会に出席されるということとおいとまをし、また岩見沢の村雲さんの

ところへ押しかける。岩見沢は北海道の内陸だけれど、実に豊富で新鮮な魚が市場にあふれている。晩にその新鮮な魚でもっておいしいお寿司をごちそうになった。奥さんのお母さんがにぎってくれたものだった。村雲さんの若い音楽仲間の桐生さんと三人で飲むが、真っ先に酔いつぶれる。

十三日、車で旭川へ、日音協北海道主催の旭川点々コンサートというのに出演する。同時にひらかれる日音協の合宿に参加することにもなっていた。

コンサートでは、旭川の労働者のグループと日音協北海道の人気バンド「ROC」の演奏の後に歌った。みんな短かく終ってしまったので、予定したより沢山歌うはめになった。会場は七、八十人位だったけれども熱心にきいてくれていて気持ち良かった。

合宿に参加といっても何をやる訳でもなく、昼間から、ずっと酒を飲んでいるだけだった。

十五日はまた札幌だ。大谷会館でひらかれる「光州三周年」の集会に出演する。

自由なる労働者、ソウルへの道、奪われし野に春は来るか、白いハト、手紙、不屈の民、そして久し振りにプリパを歌う。会場に幾人か知った顔がみえた。半日もいたおかげだ。だいぶつつかれたけれど、こうしていろんな人と知り合いになれるのはうれしいことだ。



五月もだいたいひまだった。福島敦夫は半月ばかり北海道にいたし、ほかのメンバーはそれぞれにすごして、ひさしぶりに顔をあわせたのが五月二十日、三里塚反対同盟の主催する集会で、太田区民会館には千人以上の人があつた。ひさしぶりに農民が自分たちを語る会で、いきいきしてよかったですと評判だったが、水牛楽団は時間切れで「反対同盟歌」二曲だけを最後に演奏し、会場からも手拍子とうたがきこえた。

五月三十一日、崔哲教さんを支える松戸市民の会の集会があり、六月三十日にはおなじく町田市民の会がある。

六月は九日に渋谷ジャン・ジャンで「神の道化」を再演し、それを六月二十一日、大阪

けつきよく、半月も北海道に居ただけだけれども、まだ、会いたい人も居て会えなかった、だが、そうとういろんな人が、それぞれのところでいろんなことをしているのがわかった。私達のしていることも、そんなに知られていゝるわけではないし、出会ってほしい。ただ、これから先、やってゆく希望はたしかにあるというのが今の実感だ。東京に帰って来てすぐの二十日には、三里塚の新しい集会が大田区民会館でひらかれて水牛楽団も招かれ、三里塚反対同盟の歌を演奏した。何と、江原光太さんが会場にて、江原さんの詩の朗読のあと歌ったのだ。

本場に多くの人に世話になった、特に日音協北海道の浜本氏には何から何まで面倒をかけてしまった。

バナナホール、二十二日と二十三日は沖繩ジャン・ジャンにもってゆく。一部のコンサートは「水牛楽団アンソロジー」として、あたらしくかきなおした「祖母のうた」、三宅榛名の「いちめんの菜の花」を楽団用にアレンジしたもの、ピアノでカーラ・ブレイとブゾーニの曲をひく、二部のパフォーマンスも、ことばをすこしかきかえ、音楽をかきたす予定。

四月からハルモニウムをもとの大きな方にもどした。ピッチ四三六で、八分の一音ほどひくいので、ケーナも昔の楽器にもどり、ピアニカはしめだされた。インドネシアからフランキー・ラーデンがもってきたくれた梓太鼓ラバナもはいて、水牛楽団はやはり、どこにもなくみあわせて、なじみのない音楽をやっていくことだろう。

楽器が変わるたびにアレンジをかえ、ついでに歌のことばをかえ、メロディもできればかきなおす。きき手がおぼえている曲でも、つぎにきいたときには、おなじだったのはタイトルだけということもある。

いまやりたいのは、レパートリーから歌の比重をへらしてゆくこと。歌のかげになって

たい。歌は手のあいてるときにうたう程度でたくさんだ。うまい歌などはナルシズムのわなにすぎない。歌とその伴奏のような支配の関係をもちこむのもどこかおかしい。

アジアの歌をうたっていると、アジア民衆の代弁者のおもわれ、いつか自分たちもそうおもしろいところがあることがあつて反省する。他人の声のどにとりつくことは理解や説明や、感情さえもこえているのだ。たましいがこの問いかけにいつもひらかれているようにするために、歌も対話の道具になるだろう。

六月十八日(土)代々木公園B地区でのイベント、七月九日(土)生活クラブ生協海老名配送センターのオープンニングに出演予定。

九月のカラワンと水牛と小室等によるコンサートは、いままきまっているところでは、九月三日と四日(昼夜)東京渋谷ユーロスペース、十七日の午後と夜は甲府、そのあとは信州名古屋、大阪にいくだろう。

七月には「カラワン回想録」が晶文社から出版される予定で、それにあわせてカラワンの歌のカセットを発売しようかとおもっている。くわしくは次号で。

(高橋悠治)



編集後記

この号では試験的に文字を大きくしてみました。原稿がたりなかつたせいではありませんが、水牛通信に連載していた「カラワン回想録」が本になることになり、そのゲラを見て、雑誌のときよりかなり読みやすく、文章もかっちり頭にはいることに気づいたわけです。当方の眼力がそろそろ弱りかけているのかもしれない。

結果を見て、また読んでくれた人たちの意見もきいた上で、これからどうするかをきめたいと思っています。

石毛拓郎さんへのインタヴューは、話をきいているあいだびつくりのしつづけて、テープおこしの度胸がなくなるほどでした。都心中心部より周辺地域のほうが管理がきついとのこと。いちおう想像はしていたものの、いまの小学校はそんな程度の想像をはるかにこえる状態にあったわけです。学校というものにもとそなわる閉鎖性がいっそう強化され、なにごとがおこなわれているのか、親にもわからなくなっているぞというのが石毛さんからの警告でした。

隔月発行 **凱風** 同時代の民衆史を記録。

【目次より】  
巴金 刘問文俊訳  
《随想录》第一集（上）（下）より  
佐藤忠男  
**中国映画私見**  
傅雷 白井啓介訳  
《阿Q正传》より  
**わが子は異郷にあり**  
定価四〇〇円（送料二〇〇円）

●7月号目次より●  
《特集》  
もうまわり道はごめんだ！  
——一九八三年における戦争状況  
●中国残留日本人帰国問題のその後  
●戦時下の在日朝鮮人映画人の軌跡  
●アジアに対する日本の戦後責任  
（第七号以降の発行体制）  
発売日毎月15日 判型A5判  
頁数八八—一〇〇頁 定価七〇〇円

〒一〇四東京都中央区銀座一—  
二〇—二 松村ビル四階  
株式会社 **凱風社**  
電話〇三—五六七—五〇三〇

\*子約購読の申し込みと送金は郵便振替を利用して下さい。  
口座名、水牛編集委員会  
口座番号、東京四一九一七九二  
購読料、一年分三〇〇〇円（送料共）  
半年分一八〇〇円です。  
\*住所、氏名、電話番号、何号からということを明記してください。  
\*本誌は次の書店にあります。  
模索舎（新宿） ☎三五二—三五五七  
木風舎（阿佐谷） ☎三九八—二六六六  
信愛書店（西荻窪） ☎三三三—四九六一  
アール・ヴィヴァン（西武池袋12F）  
☎九八一—〇一一—内線二九五六  
名古屋ウニタ書店 ☎七三二—一三八〇  
ワンラブブックス（下北沢）  
☎四一一—八三〇二

**水牛通信** 第五巻第六号  
一九八三年六月十日  
定価 二〇〇円  
発行人 堀田正彦  
発行所 水牛編集委員会  
〒154東京都世田谷区新町2-15-13 八巻方  
電話〇三（四二五）九六五八  
振替口座東京四一九一七九二  
印刷所 株式会社ライブリントシヨップ